

銀行行動の經濟分析

預金・貸出市場と
金融自由化

今

喜典

銀行行動の經濟分析

—預金・貸出市場と金融自由化—

今 喜典 著

東洋經濟新報社

著者紹介

昭和24年 青森県に生まれる。
昭和46年 小樽商科大学商学部卒業。
昭和48年 大阪大学経済学修士。
昭和49年 大阪大学大学院博士課程中退。
同年 大阪大学経済学部助手。
昭和52年 京都産業大学経済学部講師。
昭和57年 小樽商科大学商学部助教授、現在に至る。
著書 『現代経済学講義』（共著、中央経済社、昭和61年）。
主要論文 “Capital Input Choice Under Price Uncertainty:
A Putty-Clay Technology Case”, *International
Economic Review*, vol. 24 (1983).
「貸出金利の変動について—暗黙の契約理論アプローチ」
『商学討究』第34巻（1983）。
「銀行顧客関係：展望」『商学討究』第37巻（1987）。
「銀行・顧客関係と企業成長」『季刊理論経済学』第38巻
（1987）。

銀行行動の経済分析

定価 3700 円

昭和62年11月 5 日 発行

著者 今 喜典

発行者 高柳 弘

発行所 〒103 東京都中央区日本橋本石町1-2-1 東洋経済新報社

電話 編集 03(246)5661・販売 03(246)5467 振替 東京3-6518

印刷・製本 東洋経済印刷

本書の全部または一部の複写・複製・転載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。これらの許諾については、小社（電話03-246-5634）までご照会ください。
© 1987（検印省略）落丁・乱丁本はお取替いたします。

Printed in Japan ISBN 4-492-65104-7

は し が き

この本は、銀行の固有の役割と特徴的な行動パターンを、経済学的な基礎にもとづいてとらえなおそうとしたものである。銀行論の新しいアプローチを模索する試みの1つといえよう。その視点はミクロ経済学的であり、銀行の行動が資金の配分や金利の機能とどのように結びついているかを理論的に分析している。特に、市場においての情報の不完全性や取引を成立させるための費用という、いくつかの新しい概念を分析の駆動力として利用するところに特徴がある。

このような試みは、従来の銀行行動の理論がその重点を少しマクロ的関心に傾けすぎていたのではないかという判断から発している。すなわち金融政策の効果やその波及経路の解明にそれらの主眼があったように思われる。

たとえば代表的な銀行行動理論としてトービンのモデルがある。それは銀行を利潤極大化企業としてとらえ、そこから導かれる資産・負債の需給関数を資産市場の一般均衡分析に組み込んだ。この結果、金利や収益率の変動を通じる金融政策効果の波及プロセスを明快に示すことができた。わが国においても鈴木淑夫『金融政策の効果』や岩田一政・浜田宏一『銀行行動と金融政策』などの広く知られた研究にこの考えは応用されてきた。

しかし、個別の金融市場にいま一步踏み込んでそれぞれの資産・負債取引の性格に注意すると、それらの間に存在する1つの大きな区分に気付かざるをえない。それは、市場取引と顧客取引の区別である。債券や株式などの証券には組織された取引所があるのに対して、貸出や預金という銀行固有の取扱い商品は顧客と^{あいたい}相対で取引を行なっている。この違いは取引される資産の性質についての標準化の程度や、リスクの多様性、あるいは情報の不完全性など、広い意味での情報費用や取引費用の差異を反映していると見ることができる。この相違は、銀行行動の分析にも無視できない影響を与えている。

ところで、近年のミクロ経済学は情報の不完全性下の経済主体の理論的分析に長足の進歩を遂げた。さまざまな新しい分析用具や概念が開発され、他の分野への応用が進みつつある。本書もこのような発展を足場にしながら、銀行行動の検討にその考え方を利用しようとするのが主たる狙いである。もちろん、機械的なミクロ理論の適用によって得られるインサイトは少ないであろう。ここでは銀行を取り巻くさまざまな現実的な要因や反応をも同時に考慮するように努めたつもりである。

さて、このようなアプローチは、従来は主に銀行経営の観点から注目されてきたいくつかのトピックスにも深い関連を持っている。というのは、それらの多くは、現在の金融環境の変化の中で銀行の持つ固有の要素を見極めるときに有用な手掛かりを示してくれるからである。この点を少し説明しよう。

現在、多くの先進諸国の銀行は、進行中の金融システム転換に直面して、新しい体制の中での自らの位置と望ましい方向を模索しつつある。わが国についてみても、経済の低成長化とさまざまな規制緩和が“自由化”、“国際化”という流れをもたらし、これらを巡っていくつもの論議が発生してきた。たとえばそれらのキーワードをつなげてみると、まず「大企業の銀行離れ」や「中小企業貸出の比重増加」などに代表される資金需要者の態度の変化が目につくであろう。「金融の証券化」という言葉にこれらの傾向は行きつく。これに対しては、「スプレッド貸出」などの銀行側の工夫や「金融機関の棲み分け」、「ホールセールバンキングとリテールバンキングの分化」などによる環境適応の方策が唱えられ、現実にもそれらの着実な展開が見られる。そして、この帰結は銀行行動の質的な転換を意味するとさえ予想されている。

しかし、“情報の不完全性下での銀行の機能”に注意して検討してみると、これらの現象は単なる転換としてよりも、むしろ従来は明瞭でなかった機能が顕在化してきた状況を示していると解釈すべき点が多いのである。変換期においてこそ銀行行動の不変の要素とそうでないものの区別が容易になるであろう。これを明らかにするのが本書の1つの意図である。

以下では貸出市場と預金市場における銀行行動を取りあげている。第I部では、情報不完全性の下での貸出市場が「銀行顧客関係」という安定した協調的取引に落ち着くことを説明し、さらにそこでの銀行貸出の性格を検討する。具

体的には、まず、顧客関係の成立する条件を論じ、つぎにその下でのリスク・シェアリングの性質および企業成長への影響を吟味している。また、それぞれについて金融自由化の影響も検討する。第Ⅱ部では、預金取引費用に注目して、主に小口預金市場での銀行行動を分析する。預金金利自由化の効果がそこでの主要なテーマである。

本書の分析はもっぱら理論的なものに限られている。しかし以上から理解いただけたと思うが、その見方は従来の理論に比べてより銀行行動の細部にこだわっている。この意味で研究者にとってのみならず、実務に携わっている方々が眼前のさまざまな現象を基礎から考えなおす際にも、本書が役立つことを願っている。

本書は私にとって最初の研究書である。ここで基礎となる取引費用という概念に大学院で初めて出会い、また金融論や銀行論に興味を持ち始めてからも既に十数年経過した。このように今までの研究をまとめあげる上では、多くの諸先生、先輩、友人の御助力によるところが大きいのはいうまでもない。ここにそのすべてのお名前を挙げることはできないが、特に以下の方々には記して感謝したい。

大阪大学大学院時代、建元正弘先生には経済学において実証的精神と新鮮な見方がいかに重要かを御教示いただいた。同じ頃金融論へ目が向くようになったのは蠟山昌一先生の刺激的な授業がきっかけであった。それ以降、今日まで両先生より頂いた激励は私にとって非常に貴重なものであった。また、小樽商科大学の学生時代、経済学の面白さと奥深さを御教示いただいたのは藤井栄一先生である。同じく早見弘先生にも有益なアドバイスを頂いた。諸先生には厚くお礼申し上げたい。

本書をまとめるにあたって、多くの方々に草稿の一部に目を通して頂いた。福田充男氏（京都産業大学）からは、丁寧なコメントを頂き本書の改良に非常に有益であった。岩根徹氏（帝塚山大学）、小田切宏之氏（筑波大学）、佐竹正夫氏（小樽商科大学）にも貴重な御意見を頂いた。小樽商科大学の土曜研究会という活発な討論の場で同僚の諸先生からも有益な御意見を頂いた。これらの方々のコメントを十分に生かすことができなかったのは残念であるが、その御

4 は し が き

助力に心から感謝申し上げたい。

また、マーク・フラナリー M. Flannery 教授 (University of North Carolina) は未発表論文の引用を快く許可して下さった。ゼミナールの伊藤昇平君には原稿の清書をお願いした。東洋経済新報社出版局の渡辺昭彦氏は本書の出版を勧められ、滞りがちの執筆を辛抱強く待って下さった。同氏のアドバイスと御好意に厚くお礼を述べたい。

最後に、私事にわたって恐縮であるが本書執筆に対する妻恵子と3人の子供達の協力に感謝するとともに、自由に研究の道を歩むことを許してくれた両親に本書を捧げたい。

昭和62年9月

小樽にて

今 喜 典

目 次

は し が き

第1章 銀行取引の特性と銀行行動——本書の視点——11

- 1 預金・貸出と顧客市場 (11)
- 2 銀行貸出行動 (15)
 - 伝統的銀行行動理論 (15)
 - 情報の非対称性による市場の失敗 (18)
 - 情報非対称性への対処方法 (19)
- 3 銀行顧客関係 (21)
 - 顧客関係取引の協調的性格 (22)
- 4 銀行の預金供給行動 (25)
- 5 本書の構成 (27)

第 I 部 銀行行動と貸出市場

第2章 銀行顧客関係の研究——展望——36

- はじめに (36)
- 1 取引継続の実態 (36)
 - 2 顧客関係分析の発端 (38)
 - 預金顧客関係 (38)
 - 貸出実績と将来借入需要 (39)
 - 3 情報獲得の定式化 (41)
 - ベイジアン・アプローチ (42)
 - 4 分析視点の確立——取引固有の資産としての情報 (43)
 - わが国での研究 (44)
 - 5 顧客関係モデル (45)
 - 暗黙の契約理論 (45)

6 目 次

分担投資モデル	(46)
顧客関係の中断	(48)
6 獲得情報の価値と内部保持可能性	(49)
市場を通じる情報の公開	(50)
おわりに	(52)
第3章 内部情報と銀行顧客関係の成立	57
はじめに	(57)
1 取引形態と取引費用	(58)
情報の保持可能性	(60)
2 モデル	(61)
事後の行動と顧客関係中断	(62)
3 顧客関係の事前的成立	(64)
顧客関係下の貸出契約	(65)
4 情報の伝播と顧客関係——完全相関のケース——	(68)
顧客関係下の貸出金利	(69)
5 情報伝播とノイズ	(71)
最適利鞘の性質	(74)
顧客関係貸出金利とスポット貸出金利の対比	(75)
ノイズと顧客関係の成立	(76)
おわりに	(77)
付 録	(78)
第4章 貸出金利変動と暗黙の契約	81
はじめに	(81)
貸出金利変動の安定性	(82)
1 暗黙の契約モデル	(85)
2 貸出金利の安定性	(89)
信用割当の可能性	(89)
信用割当のない場合	(91)
信用割当のある場合	(92)
3 貸出金利変動パターンの差異と預金金利自由化	(93)
借手企業の危険回避度の相違	(93)
預金金利自由化による貸出金利変動の拡大	(96)
付 録	(98)

第5章 企業成長と銀行顧客関係 104

はじめに (104)

構想と結論の要約 (105)

1 取引形態と取引費用——企業規模の影響—— (107)

2 非継続取引下での企業 (108)

3 顧客関係下の貸出 (114)

顧客関係貸出下の銀行利潤 (115)

顧客関係貸出下の企業 (116)

最適契約の決定 (116)

4 顧客関係下の貸出契約の性質 (120)

ケース 1：(厳密な) 小企業の場合 (122)

ケース 2：中堅企業の場合 (124)

付 録 (125)

補 論 (127)

第Ⅱ部 銀行行動と預金市場

第6章 預金金利自由化と貸出金利

——インプリシット金利アプローチ—— 132

はじめに (132)

1 新商品の登場 (132)

2 金融仲介機能 (134)

規制の実効性 (136)

3 金利選好と金融革新 (137)

金融革新の発生 (139)

おわりに (143)

第7章 不確実性下の預金サービスと預金金利自由化 146

はじめに (146)

1 小口預金市場の特性 (147)

2 預金金利規制と固定的預金サービス (149)

預金金利規制 (151)

過渡期での預金金利変動パターンの推移 (153)

3 預金サービスの部分的伸縮性 (154)

8 目 次

	預金金利規制の効果 (156)	
	過渡期の預金金利変動性 (157)	
	付 録 (159)	
第8章	結 語	162
	1 新しい見方とその含意 (162)	
	2 これからの課題 (165)	
事 項	索 引	169
人 名	索 引	175

図 表 一 覧

図 1-1	金融仲介プロセス	12
図 1-2	伝統的分析による貸出市場	17
図 1-3	貸出を中心とする銀行取引タイプの想定	23
図 1-4	預金を中心とする銀行取引タイプの想定	26
図 3-1	取引費用分布と事後的継続可能性	63
図 3-2	取引費用分布と事後的継続可能性：完全相関の場合	69
図 3-3	取引費用分布と事後的継続可能性：ノイズのある場合	73
図 3-4	最適利鞘の決定	74
図 3-5	ノイズの変化と最適利鞘	75
図 4-1	全国銀行貸出約定平均金利（総合）	82
図 4-2	中小企業金融機関貸出約定平均金利（総合）	83
図 4-3	アメリカの貸出金利変動パターン	85
図 5-1	企業規模と審査費用	108
図 5-2 a	最適成長率の決定	112
図 5-2 b	株価総額と成長率	112
図 5-3	企業規模の限界値	114
図 5-4	貸出金利の比較	117
図 5-5	ケース 1：小企業	121
図 5-6	ケース 2：中堅企業	121
図 5-7 a	限界費用 F' の上昇	122
図 5-7 b	経常費用 β の上昇	122
図 5-7 c	企業収益率 p の上昇	123
図 5-8	費用の上昇	124
図 5-9	割引因子 m の性質	126
図 6-1	預金・貸出市場の均衡	135
図 6-2	預金市場の変化	139
図 6-3	預金・貸出市場均衡の変化	141
図 7-1	預金サービスの決定	151
図 7-2	事後的な (r_a, N) の決定	155
図 7-3	市場金利変化への反応	158

Ⅱ 図 表 一 覧

表 3-1	事後の行動と収益	63
表 4-1	企業規模別貸出残高構成比	94

第1章

銀行取引の特性と銀行行動——本書の視点——

1 預金・貸出と顧客市場

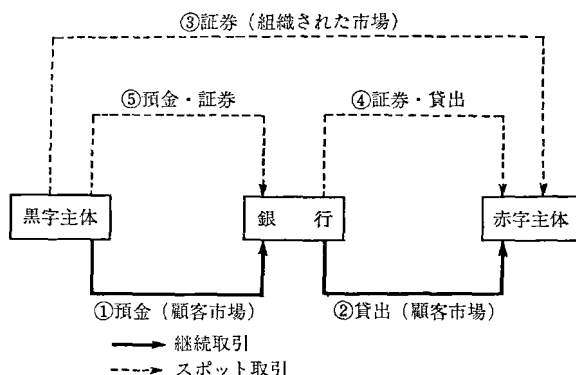
「銀行部門」は、戦後のわが国において黒字主体から赤字主体へむかう貯蓄の流れの大半を仲介してきた。近年は公的金融の比重増加もあって、資金供給全体の中でのウェイトは50%を切るなど漸減傾向にあるが、民間部門に限ってみると60%台を確保しており、いまだ圧倒的な役割を果たしていることに変わりはない。¹⁾

金融仲介プロセスにおいて、銀行部門は赤字主体の発行する本源的証券を「貸出」や「有価証券投資」という形で取得し、また、この資金調達のため「預金」という二次証券（間接証券）をみずからの負債として発行している。銀行の扱う金融資産・負債は、それらの取引される市場の性格に注目すると、対照的な2つのグループに区分できる。

1つは証券などであり、これらは証券取引所を中心とする「組織された市場」で取引がなされている。銀行もここでは多くの投資家の中の1取引主体にすぎない。これに対して、貸出と預金の市場は、銀行と顧客が個別的に取引を行なわねばならない「顧客市場」であり、銀行は取引主体であると同時に、取引の場をも提供している。取引のなされかたのこのような違いは、けっして表面的なものではなく、金融システムの資金配分の性格を分析するとき大きな意味を持っている。

組織された証券市場では、規格化された金融資産が取引対象であり、多数の投資家がスポット的に注文を出している。そして価格（金利）メカニズムによって需給均衡を迅速に達成するように市場が運営されている。伝統的な価格分析アプローチの有効性は高いであろう。一方これに対して、貸出・預金取引は銀行と顧客との相対で取引がなされ、個別的性格が強いので、価格のみに分析

図1-1 金融仲介プロセス



の焦点を当てた伝統的アプローチではとらえきれない特性があらわれてくる。

ところで、顧客市場という性格は、日常の観察からすぐわかるように、多くの財市場や労働市場においても見ることができる。たとえば消費者は、価格の低い財や品質の優れた財を求めて、情報を収集したり商店を探しまわる。労働者も同じように適当な職業の情報を求めるし、雇用者もまた労働者を探している。そして、これらの市場では、通常多くの取引主体は長い期間にわたって継続して需要（供給）を持っているので、将来の購入（販売）予定をも考慮に入れて現在の行動を決める。ここでは、今日の買い物の経験が将来の行動に影響するであろう。この結果、典型的には「顧客関係」という長期にわたる特定の買手と売手との継続的關係が成立する場合が多い。良い品質、安い値段という評判が消費者の行動に影響を与えているのである。²⁾

銀行取引においても、このような取引の性質は同様である。また、継続的な関係も「銀行顧客関係」として知られている。たとえば、企業は、貸出、預金や為替などさまざまな取引を分散せずに特定の少数の銀行にまとめており、しかもこの関係が長く続くのである。また、銀行取引では主に預金者として登場する家計も、取引相手銀行を頻繁に変えることはしない。取引の“安定性”こそ、貸出・預金市場の特徴といえよう。³⁾

以上のような金融仲介プロセスの見方を図式にまとめると、図1-1のようになる。矢印は資金の流れを示し、大きく2つのタイプに別れる。下半分の実線

①②は、預金と貸出という顧客市場での継続取引をあらわしている。上半分の点線③は直接金融であり、証券市場でのスポット取引である。これに加えて、銀行の証券投資のルート④、銀行が金融債あるいはCD等の市場性資金を調達するルート⑤もスポット的な取引である。伝統的な分析が有効と考えられる上半分のスポット取引に対して、顧客市場での継続的取引による資金配分の性格はどのように分析できるであろうか。

顧客市場という性格は、財市場、労働市場それに資金市場のいずれにおいても、「市場の不完全性」の1つのあらわれとして理解されている。価格、品質や取引相手について不十分な情報しかないときには、個々の取引者が情報収集をしたり、取引成立のために資源を投入しなければならない。

ところで、貸出や預金のような資金取引の分野では、市場の不完全性はこれまでは主に、銀行の“社会的機能”あるいはその存在理由の説明にさいして注目されていた。黒字主体と赤字主体との間での資金の移転が、取引費用などの障害で困難なとき、仲介技術を持つ専門的金融仲介機関として銀行が出現し、新たな金融資産を創造して、障害を緩和するのである。たとえばよく知られているようにガーレイ・ショウ Gurley-Shaw [1960] がこのような考えの出発点である。彼らは規模の経済性や専門化の利益を強調しているが、その背後には取引費用概念があることは明らかである。これ以降もベンストン・スミス Benston-Smith [1976] が、明示的に金融仲介機関における取引費用の重要性を主張している。

貸出や預金の決定という銀行“行動”の分析では、伝統的にこれらの不完全性は仲介の費用として定式化されていた。金融仲介活動は、通常の生産活動と同じように理解され、企業行動の理論が応用されるのである。しかし、このようなアプローチは、市場不完全性に対する銀行と他の取引者の特徴的な反応、つまり預金・貸出市場が顧客市場としてワークしているという事実の持つ意味を見逃しているように思われる。伝統的視点は、特に金融仲介プロセスでの資金配分の性質をミクロ的に検討しようとするときに、不十分となると考えられる。

本書の意図はこのような問題意識に立って、銀行の預金・貸出行動をとらえなおすことにある。具体的には、預金と貸出の顧客市場での安定的な取引行動

モデルを定式化する。貸出市場については「銀行顧客関係」が、また預金市場については「預金サービス」が中心となる概念である。これによって、市場での金利の意味、その変動性の評価、資金配分の性質などのより豊かな理解ができるであろう。資金市場での不完全性を重視する理論的な研究は、後でみるように、近年いくつか提示されている。このような研究の流れの中で、本書は特に実証的な基礎になりうるモデルの展開を心がけた。

ところで、このように銀行の機能に留意しながらその行動分析を進めるという方向は、理論的な観点からのみならず、現実的にも必要性が高いように思われる。というのは、現在のように銀行をとりまく金融環境の変化が激しい時期には、銀行行動パターンの顕著な変動が生じているが、これを理解するためには、この行動の基礎にある動機や存在理由にまでさかのぼらなければならないからである。

低成長経済への移行、国債大量発行、金融規制撤廃などによって、旧来の金融システムが大きく揺さぶられ、さまざまな新しいといわれる現象や概念が貸出市場や預金市場に出来している。たとえば「大企業の銀行離れ」、「中小企業貸出の比重増加」、「スプレッド貸出」、「金融機関の棲み分け」、「ホールセールバンキングとリテールバンキングの分化」、「金融の証券化」、など枚挙にいとまがない。

これらのあるものは、金融政策効果の検討というマクロ経済学的問題が主たる関心であった伝統的な分析にとっては、表面的現象にすぎないかもしれない。しかし、貸出・預金市場の取引構造やワーキングおよびそれらの変化の意味をミクロ的基礎から理解しようとするときには、これらの現象は有用な手がかりを提供してくれる。以下の展開においても、これらのうちのいくつかを取りあげて、その経済学的な解明を試みよう。

以下のこの章では、市場の不完全性、銀行顧客関係、それに預金サービスという、本書の枠組みをかたちづけている考えを説明して、第2章以降の導入部としよう。まず貸出行動についての伝統的アプローチと本書の視点を対比させ、ついで預金行動のとらえかたを述べる。最後に、本書の各章を簡単に要約する。